

福永武彦
訳

今昔物語



ちくま文庫



ちくま文庫

今昔物語

一九九一年十月二十四日 第一刷発行

訳者 福永武彦（ふくなが・たけひこ）

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一六一四 ㊟一一一

電話東京五六八七―二六八〇（営業）

五六八七―二六七〇（編集）

振替口座六一四一二三

装幀者 安野光雅

印刷所 三松堂印刷株式会社

製本所 三松堂印刷株式会社

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

©SADAKO FUKUNAGA 1991 Printed in Japan

ISBN4-480-02569-3 C0193

ちくま文庫

今昔物語

福永武彦訳



筑摩書房

目次

第一部 世俗

- 夜の町から家来が現われる話……………一五
- 無我夢中で賊を切り倒す話……………一九
- 童の機転で大の男が助かる話……………二四
- 大力の僧が賊をいじめる話……………二九
- 蛇と力競べをした相撲人の話……………三三
- 人質の女房が力を見せる話……………三六
- 田んぼの中に人形を立てる話……………三九
- 絵師が大工に敵討ちをする話……………四二
- 碁の名人が女に負かされる話……………四四
- 瘡を治させて逃げた女の話……………五〇
- 蛇の婚いだ娘を治療する話……………五五
- 地神に追われた陰陽師の話……………五七
- 天文博士が夢をうらなう話……………六二
- 陰陽師の子供が鬼神を見る話……………六五
- 死んだ妻が悪霊となる話……………六七
- 朱雀門の倒れるのを当てる話……………七〇
- 算道で女房どもを笑わせる話……………七三
- 玄象の琵琶が鬼に取られる話……………七九

第二部 宿 報

和歌を添えて鏡を手放す話……………八二
前の妻が和歌を詠んで死ぬ話……………八三
無学の男がわからぬ歌に怒る話……………八七
東国の武士が一騎打ちをする話……………九一

親の敵かたきと知って討ちとめる話……………九五
大盜袴垂はかまだれにねらわれる話……………一二
約束を信じて人質を許す話……………一四
親子で馬盜人を追いかける話……………一八

鷲わしに赤んぼを取られる話……………二五
蕪かよらとまじわって子ができる話……………二九
洪水こうずいに流されて木にすがる話……………三三
危みそかおうく密男とまちがえられる話……………三八
生埋いきうめにされた子が助かる話……………三三
生贄いけにえの男が猿神さるがみを退治する話……………三五
百足むかでと戦う蛇へびに加勢する話……………三七
無人島に住みついた兄妹の話……………三八〇

犬の鼻から蚕かいこの糸が出る話……………八二
雨宿りをして金持ちになる話……………八五
芋粥いもがゆを食って飽きる話……………八九
生まれた子の命を予言する話……………一二
愛欲の心を起こした修行僧の話……………二四
下女に打ち殺された武士の話……………二八
暗闇くらやみで矢を射かけられる話……………三〇

第三部 霊 鬼

水の精が人の顔を撫でる話	……二五	死んだ妻とただの一夜逢う話	……二五三
内裏 だいり の松原で鬼が女を食う話	……二七	地獄から妻を訪ねて来る話	……二五八
怪し み のものが御燈油 みあかしあぶら を盗む話	……二八	同じ姿の乳母が二人もいる話	……二五九
安義 あき の橋に現われた鬼女の話	……三〇	三善 みよし の清行 きよつら が空家へ引越す話	……二六〇
子を産みに行き鬼女に会う話	……三七	応天門の上で青く光る物の話	……二六四
恋人と泊まった堂に鬼が出る話	……三二	印南野 いなみの の夜に葬式が出る話	……二六七
鬼のため妻を吸い殺される話	……三五	女の童 わらわ に形を変じた狐の話	……二七〇
寝ている侍を板が圧し殺す話	……三七	人に憑 つ いた狐が恩を返す話	……二七三
近江 おうみ の国の生霊が京に来る話	……三九	高陽川 かやがわ の狐が滝口をだます話	……二七六
嫉妬心 しつと から妻が箱をあける話	……四三	産女 うよめ の出る川を深夜に渡る話	……二八四
獵師の母親が鬼となる話	……四七	鈴鹿山 すずか の古堂で肝をためす話	……二八八
人の姿した鬼が射られる話	……五〇	山道で常陸歌 ひたちうた を歌って死ぬ話	……二九二

第四部 滑稽

稻荷詣でに美人の女に逢う話	…二九七	尼と木伐が山中で舞を舞う話	…三三八
屈強の侍どもが牛車に酔う話	…三〇二	猫におびえた腹黒い大夫の話	…三三〇
越前の守為盛が謀をめぐらす話	…三〇五	亀に抱きつき唇を食われる話	…三三六
言葉咎めをして渾名がつく話	…三一二	谷底に落ちて平茸を取る話	…三三九
大事な場所で一発鳴らす話	…三三四	胡桃酒を飲んで溶けうせる話	…三四三
名ある僧が長持に隠れる話	…三三五	異端の術で瓜を盗まれる話	…三四六
盗人をたぶらかして逃げる話	…三七七	がま蛙を退治しようとした	
御読経の僧が平茸にあたる話	…三三九	学生の話	…三四九
鼻を持ち上げて朝粥を食う話	…三三三	自分の影におびえた豪傑の話	…三五二
米断ちの聖人が見破られる話	…三三六	墓穴を宿とした二人の男の話	…三五五

第五部 悪行

宣旨 せんし により許 ゆる された盜賊の話	…三二
何者とも知れぬ女盜賊の話	…三三
世に隠れた人の婿に入る話	…三七
人質の女房がこごえて死ぬ話	…三七
念仏の法師が天罰を受ける話	…三八〇
瓜一つ盗んだ子を勘当する話	…三八五
空家にして盜賊の裏をかく話	…三八八
盜賊から身の災難を教わる話	…三九三
悪事を働いた検非違使 けびいし の話	…三九六
小屋寺 こやでら の大鐘が盜まれる話	…三九九
羅城門 らしやうもん の楼上で死人を見る話	…四〇五
袴垂 はかまだれ が死んだ真似 まね をする話	…四〇七
明法博士 みやうぼうし が強盜に殺される話	…四一〇
鳥部寺 とりべでら で追剝 おいはぎ に会った女の話	…四一一

大江山の藪 やぶ の中で起こった話	…四二三
夫の死後に妻が売られる話	…四二七
丹波 たんば の守 かみ が胎児 いきごも の生肝 いきぎ を取る話	…四三二
日向 ひやうが の守 かみ が無実の書生を殺す話	…四三六
主殿 とのも の頭 かみ が無用の殺生をする話	…四三九
身代りとなって死んだ女の話	…四四三
わが子を捨てて逃げた女の話	…四四〇
新羅 しらぎ の国で虎と鰐 わに とが闘う話	…四四三
犬山の犬が大蛇を食い殺す話	…四四六
助けられた猿が恩を報じる話	…四四八
蜂 はち の群れが山賊を刺し殺す話	…四五三
蜘蛛 くも が蜂の復讐を逃れる話	…四五六
蛇 へび にみいられて立てぬ女の話	…四五六

第六部 人情

雨宿りの宿に一夜を契る話	……四六五
平中が本院の侍従に恋する話	……四七三
平中に逢った女が出家する話	……四七九
近江の国に婢となった女の話	……四八四
葦を刈る夫にめぐりあう話	……四九一

大納言の娘が安積山で死ぬ話	……四九六
信濃の国にあった姥捨山の話	……五〇一
海松と貝によつて縁を戻す話	……五〇三
燕を見て再び夫を迎えない話	……五〇八

第七部 奇譚

賀茂祭に高札を立てた翁の話	……五二三
別れた女に逢つて命を落とす話	……五二五
灯影に映つて死んだ女房の話	……五二九
不破の関で夢に妻を見る話	……五三三
九州の人が度羅島に行く話	……五三五

道に迷つて酒泉郷を訪ねる話	……五三七
馬に化身させられた僧の話	……五三三
北山の犬が人を妻とする話	……五三九
大きな死人が浜にあがる話	……五四四
自ら鳥部野に行つて果てる話	……五四六

太刀帶たちばきの陣で魚を売る女の話 ……五八

怪しい振舞いをした物売女の話 ……五〇

第八部 仏 法

鬼に追いかけて逃げる話 ……五五

鬼の唾つばで姿が見えなくなる話 ……六〇五

死んでも舌が残った僧の話 ……六〇

貧しい女がついに福運を得る話 ……六一〇

岩と化した尼さんを見る話 ……六三

恋の虜とりことなつて仏道に励む話 ……六二四

女の執念が凝こつて蛇となる話 ……六五

僧の稚児ちごさんが黄金を生む話 ……六二五

扇に顔を隠して死んだ狐の話 ……七〇

東宮とうぐうの藏人宗正くらうどうねまさが出家する話 ……六三〇

弘法大師が修円僧都しうえんそうずに挑む話 ……七四

銅あかがねの煮湯を飲まされる娘の話 ……六三四

京の町で百鬼夜行にあらう話 ……七七

密造した酒の中に蛇がいる話 ……六三六

源信僧都の母君の往生の話 ……六二

木の梢に現われ給うた仏の話 ……六四〇

蟹かにを助けて蛇の難を免まぬれる話 ……六八

天狗に狂った染殿そめどのの後の話 ……六四三

とんだ婿入りして笑われる話 ……六三

天狗を祭る法師に術を習う話 ……六四八

危うく賊難を逃れた夫婦の話 ……六七

まちがって魂が他人にはいる話 ……六五三

欲心から娘を鬼に食われる話 ……六五

注釈 池田弥三郎…六五

解説 贅沢な楽しみ 池上洵一…六七

今昔物語

『今昔物語』は三十一巻から成り（ただし欠巻を含む）、その巻一から巻五までは「天竺^{てんじく}」の部、巻六から巻十までは「震旦^{しんたん}」の部、巻十一から巻卅一までは「本朝」の部という構成になる。全体にわたって千にある短い話が収められている。これらは必ずしも漫然と排列されているのではなく、そこに一定のシステムがあり、そのためには全体を通読する必要がある、というのが訳者の本来の意見である。しかし、ここに口語訳するものは、頁数の都合から百五十五篇で、全体から見ればごく一部にすぎない。そこで英断を持って「天竺」（インド）と「震旦」（シナ）とをばぶき、「本朝」の部のみから抜萃することにした。選択は訳者の文学的嗜好^{しこう}にもとづいている。全体を八部に分けたのは訳者の勝手で、原典のままではないが、これは読者諸氏の便利ということを考えたからである。その説明は、各部の扉裏にある。

第一部 世俗

「本朝」の部は卷十一から始まるが、卷廿に至る「仏法」は最後に回すことにした。そこでまず第一部として、「卷廿三本朝」「卷廿四本朝附^{つけたり}世俗」「卷廿五本朝附世俗」の三卷から二十六篇を選んだ。「仏法」に続く卷廿一は欠卷（おそらくは宮廷に関するものと思われる）、卷廿二は藤原氏の列伝で、そのうちの一篇は第七部に訳出する。卷廿三は「世俗」とはなっていないが、前半が欠けていて第十三話から始まっているから性格が明らかでない。その後半は力持ちの話である。卷廿四は前半が各種の名人譚^{たん}で、後半は和歌の靈験を扱っている。卷廿五は新興階級である武士の話ばかり集めてある。この他に卷廿八もやはり「本朝附世俗」だが、これは第四部としてまとめた。「世俗」というのは「仏法」と並んで、「本朝」の部を大きく二分することもできる分けかただが、この第一部では世間話^{せけんわ}というくらいの意味である。

夜の町から家来が現われる話

今は昔のこと、宇治殿が関白として世に時めいていられたところのことである。三井寺の明尊僧正が、護持僧として夜も御殿に勤めていたが、殿はいっこうに燈明の火を入れるようお命じにならなかった。というのは、しばらくしてから僧正を外出させるおつもりで、そのことを誰もまだ知らなかったのである。

用向きを達して夜のうちに帰って来てもらいたいと、不意の使いの趣を僧正にお告げになると、厩のなかから、癩癧もなく物に驚くこともないおとなしい馬を選んで移し鞍（儀装の鞍）を置くよう命じて、

「供をして行かせるのだが、しかるべき者が誰かいるか？」

とお尋ねになった。

そこに左衛門尉平の致経が伺候していたので、その旨を言上すると、

「それでよい」

とおおせになった。